

【ポスター発表】

グループホームにおける「地域記憶」を用いた回想法的プログラムの実施と評価
ーDCMによる観察評価と職員へのヒアリング調査を通してー

○ 日本福祉大学 伊藤美智予 (4726)

中村 裕子 (認知症介護研究・研修大府センター・8632)、松尾 弥生 (株式会社 南阿蘇ケアサービス・009904)

キーワード3つ：地域記憶、回想法的プログラム、介護サービス事業所

1. 研究目的

熊本県 A 村にて、震災復興支援の一環として地域住民や行政、介護サービス事業所等とともに「地域記憶」を作成した。「地域記憶」とは、地域住民から提供いただいた写真をもとに編集した地域住民の生活の変容を示す映像集である。成果物としての「地域記憶」は、「地域における活用」「介護サービス事業所における活用」の2つの活用場が想定される。前者については、地域住民を対象とした上映会をすでに開催し、「地域への愛着が高まった」など概ね肯定的な評価を得ることができた。後者では、介護サービス利用者を対象とした地域回想法的ツールとして認知症ケアへ応用することが期待される。

本研究では、介護サービス事業所における活用の一環として、グループホームにて「地域記憶」を用いた回想法的プログラムを実施し、認知症ケアへの応用可能性について検討することを目的とした。

2. 研究の視点および方法

A 村 B グループホームにおいて、「地域記憶」を用いた回想法的プログラムを実施した。その有用性を評価するため、次の2つの手法を用いた。

第一に、利用者5名を対象に、Dementia Care Mapping (DCM) 法による観察評価を行った (2024 年 11 月)。DCM とは、「パーソン・センタード・ケア」理論を提唱した英国の T.Kitwood が開発した認知症をもつ人の行動 (アルファベット表示) や感情気分、集中度 (-5、-3、-1、+1、+3、+5 の6段階表示) などを5分毎に観察する評価手法である。①「地域記憶」視聴時 (視聴時)、②体操時間・トイレ誘導 (体操時)、③個別ケアなどの活動時間 (個別ケア時) の3群に分け、DCM 観察者2名が利用者の状態を観察評価した。①②③の観察時間は概ね各 40~45 分程度であった。収集したデータから各時間帯における利用者の状態について比較分析するとともに、事例分析を行った。

第二に、職員4名を対象にヒアリング調査を実施した。回想法的プログラムの終了後に、利用者の普段の様子との違いなどについて尋ねた。所要時間は1人あたり30分程度であった。得られたデータを一部抜粋して記述した。

利用者は5名とも女性であり、「80歳代」3名で「90歳代」2名であった。認知症自立度は「Ⅲa」3名、「Ⅱb」1名、「Ⅱa」1名であった。

3. 倫理的配慮

対象者や家族に研究の趣旨、研究への協力は任意であること、協力できない場合も不利益はないこと、成果発表すること等を説明し、同意を得て実施した。日本福祉大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会の承認を得た（承認番号 21-018-02）。共同研究者の承諾も得た。なお、本研究に関連して開示すべき COI はない。

4. 研究結果

(1) DCM 評価

1) 感情・気分と関わりのコード/平均値

①視聴時には「+1」が 33 個、「+3」が 8 個、「+5」が 1 個みられた。6 段階評価の平均値は +1.4 であり他の時間帯より高かった。②体操時は「+1」が 39 個で、平均値は +1.0 であった。③個別ケア時は「+1」が 30 個、「+3」が 2 個で平均値は +1.1 であった。

2) 行動カテゴリコードと感情・気分と関わりの関連

①視聴時の「+3」「+5」はすべて「G（回想・人生をふり返る）」であった。③個別ケア時は、「A（職員との交流）」や「V（一緒に仕事をしている）」際に「+3」が観察された。

3) 事例分析

①視聴時に「G」が記録されたのは 3 名であった。映像視聴に最も反応があった利用者（認知症自立度Ⅱa）は、視聴時間中「G」が継続し、「+3」が 7 個、「+5」が 1 つみられた。残り 2 名は途中から見始め、後半 25 分間はずっと「G」で「+3」が 1 つの利用者（同Ⅲa）と、後半 20 分視聴し「+1」が多かった利用者（同Ⅲa）であった。

(2) 職員へのヒアリング調査

利用者の様子について、「すごい興味をもって楽しそうに見ていた」「煮しめの具材を聞いたら、結構話していた。問いかけの内容によっては言葉が出るんだなと思った」「思わず涙を流された利用者がいた」「思い起こしながら、食事の時もそのことを会話していた」「始まって結構集中されていて、しっかり見られていた」などが語られた。

5. 考察

DCM 評価では、視聴時は他の時間帯と比べ「+3」「+5」が多かったことから、活動に集中している度合いが高かった。認知症自立度が比較的重度な利用者においても、「地域記憶」の視聴に反応がみられた。職員から見ても、回想法的プログラムの実践が利用者の「良い状態」につながっていた。以上より、「地域記憶」を用いた回想法的プログラムは、グループホーム利用者に対し概ねポジティブな影響を与えたことが示唆された。地域共生社会に向け、「地産地消型認知症ケアモデル」の可能性が示された。

【謝辞】本研究は JSPS 科研費 21K01960 の助成を受けて実施した研究成果の一部です。